

## はじめに

窓の外が明るくなってきて、スズメの鳴き声で目を覚まします。今日もよい天気のようにです。そして、「ああ、今日は学校には行かない日なんだ」と思います。こんな日が増えました。昭和33年からの45年間の勤務を一応終えた67歳の春、「週に5回の日曜日」という生活が始まったのです。戦争中のスローガンは「月月火水木金金」でしたし、月2回の土曜休業というのは公立学校勤務の最後の年だけでしたから、ずいぶんゆとりができました。

このゆとりを生かして「思い出の数々をまとめる」ことにしました。45年間には、楽しかったなあ、よくやったなあ、あの時はドキッとしたなあ、などといった思い出がいっぱいです。ふり返ると、最初のころ受け持った子どもたちはもう55歳になっていて、今年理科を教えているのは13歳の中学2年生、こんな大勢の子どもたちが目に浮かびます。

もう世の中に出て活躍している子どもたちに出会うと、  
「この仕事についてほんとうに良かったと思っています」  
「小さいころからの夢を追いかけてきて良かったです」  
「一時は苦しかったけど、やり続けてきたのが良かったんですね」  
「子育てってやりがいのある仕事です。私の生き甲斐です」  
といった言葉が聞かれます。

子どもたちの「〇〇してて良かった」という言葉に、私も大きな声で「先生してて良かった」と言いたいと思います。そんなことから、この言葉をタイトルにすることにしました。

ところで、私の教員生活は、4つの小学校に14年、2つの中学校に16年、私立の高等学校2つに7年、これに県教育委員会での勤務8

年を加えた 45 年です。この間に受け持った仕事は多様でしたから、書きたいことはいっぱいあります。いっぱいあるとなると、何から書けばいいのか、逆に戸惑います。

そこで、私は、これにある制約を加えました。普通は、書きやすくするために制約を解除し、どんなことでもいいからとするのですが、学生時代から「試験前だ。さあ勉強しなければ」となると、試験に関係ない別の仕事や遊びに目が向き、それがはかどるという私です。あえて、制約を加える中で、この仕事をスピードアップできるのではないかと考えたのです。

その制約とは、「あ、い、う、え、お」の各文字から始まる題名をつけることでした。「を」や「ん」も加えました。そのかわり、文章の長さは自由にすることにしました。かつて、校長室から発信した学校だより「でんしょぼと」や「すくすく」を、毎号一定の枠の中に納め、1字もはみださない、1行足りないということがないようにすると決めて 396 号まで発行したというのとは対照的なやり方です。

あえて、やりにくい条件を設定して、これに挑戦するというのは自虐的かもしれません。でも、それは、「教科書さえ手に入らず、子どもが読めるような本がない」「ノートや鉛筆は配給制、生きていくために必要な最小限の食料さえなかなか手に入らない」という少年時代を生きた者が、今の何でも揃っている、それどころか何も彼もがあふれている社会で考えつくことなのでしょうか。

ここに書いた思い出には失敗談もふくまれています。それは、校内研修のあと、校長室にやってきた若い先生の話の影響です。彼は、「校長先生、とても勉強になりました。特に『ぼくもこんなことをしたことがあるんだよ』とお話しになった失敗談、いろいろ考えさせられました。ありがとうございます。先生に失敗談、失礼な期待だと

と思いますが、ありましたら、また聞かせてください」

と言ったのです。でも、皆さんに読んでいただくもの、残すものとしては失敗談をあまり多くしたくないと思います。そこで、これについては精選させていただきました。

平成8年5月に上梓した『『すくすく』はまだ?』は生駒小学校長として子どもたちに、親たちに、先生たちに話しかけてきたこと、やってきたことのまとめであり、この書名は子どもから私への問いかけでした。平成11年5月の「やっぱり理科は面白い」は、小・中・高等学校や県教育委員会での理科担当の教員としてやってきた仕事のまとめとこれからの理科教育・生活科教育への期待であり、この書名は長い間、理科を教えてきての私の結論でした。

こう考えると、この「先生してて良かったー教育随想・あ〜んー」は、45年間の思い出をとりまとめようとするものであり、教員という仕事を続けてきて良かったということの集成であるということになります。そして、これからの教育に望むこと、これからの教育に期待することなどを付け加えることにしました。お目通しいただき、ご批評賜ることができれば幸いです。

竹中 良行